

**自他のよさを認め、互いを尊重しながら
すすんで他者とかかわる生徒の育成**
—スクールカウンセラーと行う保健教育と交流活動の実践を通して—

1 主題設定の理由

2 研究の目標及び計画

- (1) めざす生徒像
- (2) 研究の仮説
- (3) 研究の手だて
- (4) 抽出生徒について
- (5) 研究計画

3 研究の実際

- (1) 手だて1 スクールカウンセラーと連携して実施する保健集会と学級活動
- (2) 手だて2 朝の交流活動「ホミトーク」
- (3) 手だて3 委員会活動で生徒が主体となってすすめる交流活動

4 研究の成果

- (1) 手だて1について
- (2) 手だて2について
- (3) 手だて3について

5 今後の課題

第9分科会
保健・体育
A 保健

宇野 実里 (豊田・保見中)

研究の概要報告

1 県内の自主的研究のとりくみ状況

保健体育（保健）分科会では「子どもが生活の主体となるための保健教育」をテーマとして、①子どもが自ら課題を見つけ、解決の方向を見出していく力を育むための指導・支援のすすめ方②他教科との関連③校内の協力体制、家庭・地域との連携のすすめ方④とりくみに対する評価の手だてなどについて、実践内容や成果が報告された。

本次教研のレポート数は13本で、どのレポートも各学校、あるいは地域での健康課題の実態に即し、子どもが健康な生活を送るための実践力を育てることをめざして、日々努力されている実践であった。

2 本次集会で論じられた主要な課題

<指導方法・指導形態の工夫>

タブレット端末を活用し、自分の口腔の様子を観察する歯科保健指導やブラックライトを利用した手洗い指導、生活習慣の振り返りと個別指導を組み合わせた実践が報告された。

研究協議の中で、家庭への働きかけについて、保護者も一緒にとりくめる内容にしたり、保護者の声や悩みをあらかじめ聞いたりしてから指導内容を決めると、家庭の協力を得られやすいなどの意見が出された。

<心・命・性に関すること>

自他の命を大切にしようとする生徒、自他のよさを認め合えるコミュニケーションがとれる生徒の育成をめざし、教科などを横断的に組み立て継続的にとりくまれた「いのちの授業」やスクールカウンセラーと連携した指導の実践が報告された。

研究協議の中では、どのように評価するとよいか話し合われ、活動後の感想、発言内容の変化、行動変容など学級担任にも聞き取りを行い、集団だけでなく個の変容を見ることも大事だということが確認された。

<保健・総合などでの指導のすすめ方>

感染症予防、がん教育、危険予知トレーニング、歯肉炎予防など、保健領域だけでなく他教科との連携をはかった実践も報告された。

研究協議の中で、子どもたちの意識を継続させるために、指導を単発で終わらせない、外部講師を活用するなど効果をあげるための手だてについて意見が出された。また、がん教育をすすめる上で学習への組み込み方や配慮のあり方などが確認された。

<生活にいきる保健教育>

学校全体で保健教育にとりくみ、手洗い指導、食育、安全マップ、体力づくりなどを組み入れた実践や心と体の両面から健康を意識できるようなとりくみが報告された。

研究協議の中で、校内での協力体制や指導時間の確保については、学校保健年間計画に組み入れて、教職員に行事の内容や意図をしっかりと伝えると効果的だと話し合われた。

今後も家庭や地域との連携を深め、子どもが自ら健康課題を見つけ、解決できるような実践研究が推進されることを期待したい。

(坂田利弘・山田真紀)

報告書のできるまで

第71次教育研究愛知県集会保健・体育（保健）分科会は、10月16日にWEB開催された。

この県集会では、第70次教研までの成果と課題をもとに、各分会やサークルでの研究実践が13本報告された。実践内容は保健教育の全分野にわたり、指導方法・指導形態の工夫、心・命・性に関すること、保健・総合などでの指導のすすめ方、生活にいきる保健教育などの実践が寄せられた。質疑応答が活発に行われ、熱心な討論のなか、研究がより深められていった。

助言者	坂田 利弘（愛知教育大学）	山田 真紀（海部・神守中）
教育課程研究委員	立松 美穂（名古屋・大森小）	金森佐知子（田原・童浦小）
	山田 知子（名古屋・自由ヶ丘小）	中谷 育子（一宮・萩原小）

1 主題設定の理由

本校は全校生徒 320 人のうち、約 4 割を外国にルーツのある生徒が占める中規模校である。生徒は、国籍を問わず明るく素直で、行事にいきいきととりくむ姿がみられる。しかし、小学校の頃に外国にルーツのある児童とまったくかかわりをもつことなく中学校へ入学する生徒も多く、急激な環境の変化に順応できない生徒もいる。校内では外国語、主にポルトガル語が飛び交い、文化・言語の違いからのトラブルが発生したり、コミュニケーションのとり方がわからず、交流に消極的な生徒がいたりする。また、自分に自信がもてず、将来や人間関係に不安・悩みを感じている生徒の増加や、集団生活に不適應を起こす生徒の増加など、人間関係の形成が困難になっている現状がある。一方で、保見中生として大切にしたい姿を問うと、「交流してたくさんの意見を知ること」、「違いを認め合ってそれぞれのよいところを吸収していくこと」など、多様な文化環境にある保見中生として他者とのかかわり合いの中で成長していきたいという意見が多く出てきた。

そこで、自他の違いやそのよさに気付くことで、互いを尊重する意識を高め、自らすすんで他者とかかわることができる生徒を育てたいと考え、本研究にとりくむことにした。

2 研究の目標及び計画

(1) めざす生徒像

自他のよさを認め、互いを尊重しながらすすんで他者とかかわることができる生徒

(2) 研究の仮説

スクールカウンセラーと連携した保健教育において心の専門的な知識やコミュニケーションスキルを学んだり、学級活動や委員会活動において意図的な交流活動を実施したりすることにより、自他のよさを認め、互いを尊重しながらすすんで他者とかかわることができるようになるだろう。

(3) 研究の手だて

<手だて 1>保健集会や学級活動で、心の専門的な知識やコミュニケーションスキルについて学ぶことにより、自他の内面に関心をもち、互いを尊重したかかわり方について考える機会を設ける。

<手だて 2>朝の交流活動「ホミトーク」でゲーム性のある対話を通し、自他理解を深めることで他者とかかわる楽しさを感じる機会を設ける。

<手だて 3>委員会活動で生徒が主体となってすすめる交流活動を通し、自他のよさを認め合い、他者とかかわる楽しさを感じる機会を設ける。

(4) 抽出生徒について

< Aの実態 >

中学校入学時までは、外国にルーツのある児童とほとんどかかわりをもったことがなく、常に日本人グループの中にいる。固定された人間関係以外の場では自己主張が苦手である。

< Aに期待する姿 >

心についての専門的な知識を学習したり、交流活動の中で自己表現したりすることで、多くの人とのかかわりを楽しみ、自信をもって自分の感情や思いを表現できるようになってほしい。

(5) 研究計画

2019年度 一年次	○委員会活動ハッピースマイルデー<手だて3> ・毎月3日に実施 ・ハイタッチであいさつをする日 ○保健集会(10月)<手だて1> 「コミュニケーションマスターへの道～伝える・伝わる編～」 ・自他の違いについて ・“伝える”難しさや、“伝わり方”の違いを知る
2020年度 二年次	○ホミトーク<手だて2> ・週に2回程度実施する交流活動(朝の読書時間) ○保健集会(11月)<手だて1> 「～心の冒険バラエティー～自分探しにイッテQ」 ・エゴグラムで自己理解を深める
2021年度 三年次	○保健集会(6月)<手だて1> 「～I am OK! You are OK!～自分も相手も大切にしたコミュニケーションをとろう」 ・自他を尊重したコミュニケーション方法について学ぶ ○愛メッセージ週間(6月)<手だて3> ・心が温かくなるような言葉を伝え合う活動



自他のよさを認め、互いを尊重しながらすすんで他者とかわることができる生徒

3 研究の実際

<手だて1>保健集会や学級活動で、心の専門的な知識やコミュニケーションスキルについて学ぶことにより、自他の内面に関心をもち、互いを尊重したかかわり方について考える機会を設ける。

(1) 体験的なワークで自他の違いについて学ぶ

2019年度(10月)の保健集会では、スクールカウンセラーの助言で、人それぞれ言葉の受け取り方が違うことや、「伝える・伝わる」難しさを体験的に理解させるために「伝言ゲーム」、

「お絵かきゲーム」の2つのワークを実施した。「伝言ゲーム」では、ほとんどのグループが伝言のはじめと終わりですらまったく違うメッセージが伝わり、驚きの声があがった。「お絵かきゲーム」では、一人ひとりが同じ情報を聞き、それぞれが感じた通りに絵を描いた。完成した絵を周りの生徒と比べると、それぞれが異なる絵を描いていた。スクールカウンセラーより、人は家庭環境や出身地が違うことはもちろん、重ねてきた経験やそのときの感情も違うため、人それぞれ考え方や物のとらえ方が違うことは当然のことであること、また、情報が食い違う原因や、“伝える”が“伝わる”形になるための秘訣を学んだ。事後の振り返りでは、「人により言葉の受け取り方が違うことがわかった」、「家という言葉だけでも、人それぞれ思い描くイメージが違った」などの感想が記述されていた。Aは保健集会を通して、次のように感想を記述している。

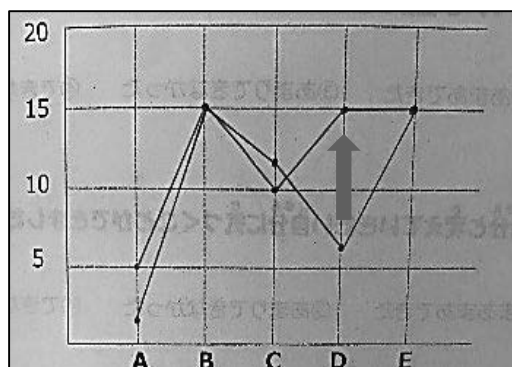
<Aの感想>

私は今日話を聞いて、人それぞれ感じ方が違うからこそ、相手のことを傷つけずにコミュニケーションをとることが大切だと思いました。伝言ゲームでは、全く違うことが伝わってしまったので、言葉を伝え合う難しさを感じました。

生徒の感想から、体験的なワークを通して自他の感じ方の違いに気付くことができたことが読み取れる。自他のよさを認め合うことまではできなかったが、自他の違いへの気付きから、他者を尊重したかかわり方をしようという意識が高まったことがわかった。

(2) エゴグラムを活用して自己理解を深める

2020年度(11月)の学級活動では、養護教員とスクールカウンセラーのティームティーチングでエゴグラムを活用し、自己理解を深める指導を実施した。まず、スクールカウンセラーから性格を表す5つの心(厳しい親の心、優しい親の心、冷静なおとなの心、自由な子どもの心、控えめな心)について、学年部の教員やキャラクターを当てはめて説明した。次に、エゴグラムを自己分析し、意外だった部分やその通りだと思った部分、これからも大切にしたい部分などを見つめ直す時間を設けた。自己分析の際に、エゴグラムは一律に理想的なグラフではなく、性格のよい・悪いを決めるものではないことを伝えた。その後、自分が理想とするエゴグラムを追加し、5つの心のあげ方についてブレインストーミングを行った。Aは自己分析の結果、人とかかわる際の傾向として、消極的で自分を表現できないことを自覚していた。そして、その心をあげたいと感じていることが追加のエゴグラムから読み取れる(資料1)。



資料1 Aのエゴグラム

Aは2年次の学級活動を通して、感想を次のように記述した。

<Aの感想>

自分のよい面と足りない心があったので、よい面はそのままに、逆に足りないところは変えようと努力することをがんばっていきたいです。

また、今後の生活にいかしたい目標について、使っていきたい言葉として、「うれしい!」「たのしい!」、とりたい態度・行動として、「人に話しかける」「常に笑顔でいる」と記入した。Aの感想や目標から、この活動を通して自分のよさや改善したい点も含めて自己理解が深まったことが読み取れる。

(3) 自他を尊重したコミュニケーションスキルについて学ぶ

2021年度(6月)に実施した保健集会では、スクールカウンセラーと連携し、自分も相手も大切にしたいコミュニケーションスキルについて考えさせた。コミュニケーションの3パターン(いばりやさん、おどおどさん、さわやかさん)について養護教員が説明した。テスト前に遊びに誘われた場面を想定した断り方を例に、保健委員会の生徒が演じた3パターンの動画を流し、それぞれの印象の違いを考えさせた。次に、「グループで修学旅行の行き先を決めているなか、意見を言い遅れた」という場面設定でペアの子とロールプレイングを行った(資料2)。スクールカウンセラーからは、自分も相手も大切にしたいコミュニケーション方法は1つではなく、何度も挑戦する中で学んでいってほしいということも伝えた。最後に、養護教員が普段気をつけていることの1例として「YOUメッセージとIメッセージ」について取りあげ、伝え方によって受ける側が感じる印象が違うことを再確認した。事後の振り返りでは、「いつも自分がどんな話し方をしているか意識していなかったけど、話し方を意識して生活したいと思った」、「自分も相手も大切にすることで、お互いが気持ちよい会話をしたかった」といった感想が記述されていた。



資料2 ロールプレイングをするA

<Aの感想>

伝えたいことは同じだけど、伝え方だけで相手も自分も気分が悪くなってしまうことがわかった。私もおどおどさんみたいな話し方をしてしまうことがあるので、気をつけたい。先生が話していたIメッセージを意識して使ってみてみたいと思った。

Aの感想から、動画の比較やロールプレイングを通して、伝え方により受ける側が感じる印象の違いを理解したり、自分のコミュニケーションの傾向の気づきにつながったりしたことがわかる。また、Iメッセージを意識して使ってみてみたいという文面からは、自分も相手も大切にしたい話し方を意識したいという思いをもつことができたといえる。

＜手だて2＞朝の交流活動「ホミトーク」でゲーム性のある対話を通し、自他理解を深めることで他者とかかわる楽しさを感じる機会を設ける。

2020年度（休校明け6月～12月）は、週に2回程度、朝の読書時間を使い、グループでの交流活動「ホミトーク」を実施した。（感染症対策のため、2019年度入学者のみを対象として実施）養護教員が考えた内容だけでなく、学年部の教員が発案した内容も取り入れながら、担任が各学級で実施した。

活動内容は以下の通りである。

（1）コミュニケーションを促すカードゲーム

①カードを引き、お題に沿った内容について話をするゲームを行った（資料3）。気軽に答えられる内容や、感情・価値観に関する内容について話をした。（例「あなたが大切にしているものについて教えてください」、「あなたが“がんばった”と思うのはどんなとき？」など）。生徒からは「自分を知ってもらえるのも楽しいし、相手を知ることもし楽しい」、「みんなの性格や好きなものや嫌いなものがわかって話す機会が増えた」などの感想が出てきた。自他理解を「楽しい」と感じ、自己開示が促進された結果、互いの共通点やよさに気付くことができたと考えられる。また、相手をよく知ることで、会話のきっかけができ、すすんで他者とかかわる意欲が高まったことがわかる。その他に、お題に沿って人や物を褒めたり、マイナスな言葉をポジティブな言葉に変換したりするゲームを行った。（例「あなたの右隣の人の性格を2つ褒めてください」、「トイレを褒めるときにどんな言葉で褒めますか？」など）。照れながらも互いを褒め合う生徒の姿が多く見られ、普段は意識していない自他のよさを認め合うことができたといえる。



資料3 ホミトークの様子

（2）私の四面鏡～いいとこミッケ～

「やさしい」「おもしろい」「がんばりや」など、30項目の中からグループの子にピッタリだと思うイメージを3～5つ程度選ぶ活動を行った。事後の振り返りでは「他の人のよいところがよくわかった」、「人のことを考えるときは5つじゃ足りなかった」、「いつも言いたくても言えなかった友だちの大好きなところをはっきり伝えられて嬉しかった」などの感想が記述されていた。活動を通して他者のよさを見つけることができたとわかる。また、「自分では気がつかなかった自分のよさに気がついた」、「自分の直そうと思っていたところをみんながよいところだと思ってくれていて嬉しかった」などの感想から、他者から見た自己像を感じることで、自分のよさにも気付くことができたことがわかる。

(3) 激論！これがわたくしたちの正解！

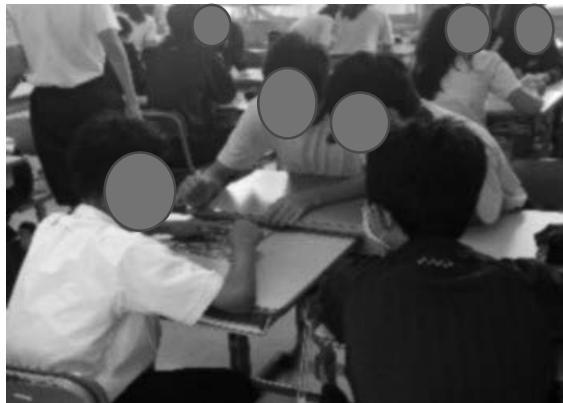
お題（例『『あ』から始まる言われて嬉しい言葉は何？』）に対して一人ひとりが考え、意見を出し合った後に、グループ内で話し合い、最も納得できる自分たちの正解を決めるという活動を行った。「同じお題でも違うことを考えていて面白かった」、「それぞれ違う意見を聞いて、どれが一番よいか決めるのが楽しかった」などの感想が記述された。人それぞれ違う発想をもっていることに気付き、その違いそのものを楽しむ姿がみられた。

お題『『あ』から始まる言われて嬉しい言葉は何？』
について、生徒が出した意見の例

「会えてよかった」、「雨降らないよ」
「I need you」、「明日席替えです」
「ありがとう」、「あいしてる」など

活動全体を通して

対話活動の他に、グループ対抗間違い探し（資料4）、似顔絵まねっこ選手権、ジェスチャーゲームなども行った。教職員からは、「子どもが競いながらできる活動は特に盛り上がった」、「ゲームを通して対話することで会話が弾んでいた」などの感想があがった。ホミトークのまとめでは、「人と話すことが苦手だったけど、少しずつ人と話せるようになっていき、嬉しかった」、「たくさんの子となかよくなれたから、他クラスの子ともやってみたい」などの感想が記述されていた。継続的に交流することで、他者との信頼関係が築かれ、すすんで他者とかかわるための自信につながったことがわかる。



資料4 班対抗間違い探しの様子

Aの変容～振り返り用紙から～

Aは、積極的に人に話しかけることに対して苦手意識があり、ホミトークの目標を「他の人に積極的に働きかけることができるようになること」としていた。ホミトークを始めてから1か月後（7月）の振り返りの中では、「自分の考えや気持ちを積極的に伝えることができたか」の質問に対して「あまりできなかった」と答えていた。しかし、10月の振り返りには「意見がはっきり言えるようになった」と記述されており、変化がみられた（資料5）。また、12月のまとめの感想では、固定された人間関係から一歩ふみ出し、積極的にかかわることができたことが読み取れる（資料6）。Aは全ての活動に対して「楽しかった」と答えている。楽しみながら繰り返し他者と交流することで、相手との関係が深まり、すすんで他者とかかわることができたと考えられる。また、普段の生活の中でも外国にルーツのある生徒と話す姿がみられたり、休日に一緒に遊んだという話を聞くことができたりしたことから、交友関係が広がったことがわかった。

ふだんきけなひことかきけたり、あまり話したことのない人と話せたりしてクラスの中で、もうグループができてしまっているけど、その中に入って話したりとかかできるよになった。

資料5 10月の振り返り

ホミトークをしてから班活動のなかで意見がはっきり言えるよになった。

資料6 12月のまとめの感想

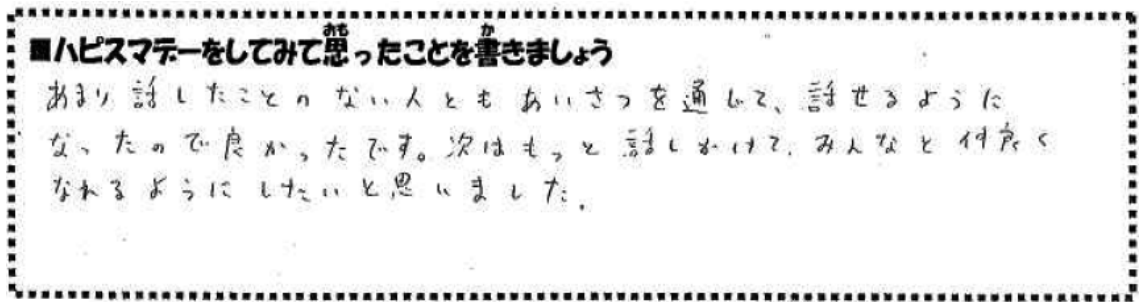
<手だて3>委員会活動で生徒が主体となってすすめる交流活動を通し、自他のよさを認め合い、他者とかかわる楽しさを感じる機会を設ける。

(1) ハイタッチを取り入れたあいさつ運動「ハッピースマイルデー」

本校では委員会活動の一環として、月曜日と木曜日の登校時と下校時にあいさつ運動を実施している。2019年度は毎月3日を保見の日とし、①大きな声で②笑顔で③ハイタッチをしてあいさつをしようという日を設けた。保健委員会の生徒がハートのシール入れを首にかけ、あいさつができていない生徒にオリジナルシールを配付して回った。シールをもらった生徒は専用の台紙に貼り、活動成果を可視化することで意欲を高めた。保健委員の生徒から「特定の人しかあいさつしないのではないか」という意見が出たため、「同じクラスの子」・「話したことがない子」・「異性の人」と各月ごとに目標を変え、積極的にあいさつができるようにした。その結果、なかのよい友だち同士だけでなく、誰とでも隔てなくあいさつする姿がみられた。(資料7) 事後の振り返りでは、「あいさつをして気持ちが明るく1日過ごせた。いろんな人とも話せて、改めてあいさつは大切だと思った」、「あいさつに何も感じていなかったけど、ハイタッチをすることで楽しいあいさつになった」という感想が記述されていた。ハイタッチを取り入れたあいさつをすることで、他者とかかわりを「楽しい・気持ちよい」と感じる事ができたとわかった。Aの感想(資料8)からも、他者へ働きかける意欲が高まり、多くの人とかかわりをもつことができたとわかる。



資料7 ハイタッチであいさつをする様子

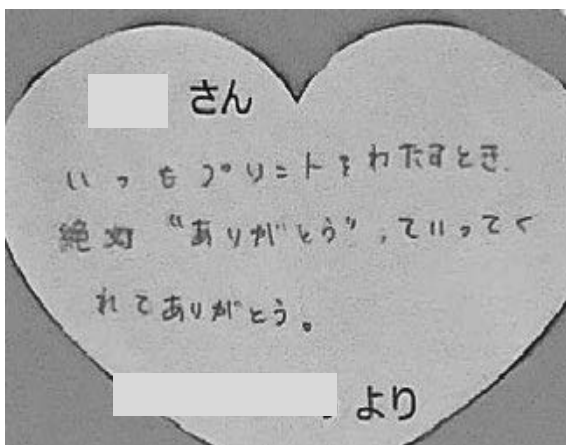


資料8 Aの感想

(2) 温かい言葉がけを意識する「愛メッセージ週間」

2021年度に行った保健集会後に、保健委員会で企画した「愛メッセージ週間」を実施した。主な活動内容としては、心が温かくなるような愛ある言葉（愛メッセージ）を1日の中でどの程度伝えることができたかをチェックする活動と、各学級でハートの掲示物に他者への愛メッセージを記入して貼っていく活動の2点を行った。愛メッセージのチェック項目に関しては、「ありがとう」、「最高！神！」、「ファイト！」など、自分たちの思う愛メッセージを委員会で具体的に考えて項目に取り入れた。また、給食時の放送で愛メッセージの一部を紹介することで、伝える側と受け取る側の双方の承認欲求を満たしつつ、全校生徒に向けて活動への意欲化をはかった。生徒からは、「このメッセージを放送してほしい」とリクエストをもらうこともあり、放送により、愛メッセージ週間のとりくみの活性化につながった。「自分のよいところを見てくれて嬉しかった」、「みんなのよいところを意識して見るようになった」などの感想から、自他のよさを認め合うことで伝える側も受け取る側も楽しんでとりくむことができたといえる。中には、「あまり話したことがないけど話しかけてほしいな」と、メッセージを介して新しい交友関係を築こうとする生徒もいた。Aは普段から親しい友だちの他に、外国にルーツのある生徒に対して愛メッセージを記述していた（資料9）。

Aは副委員長として「愛メッセージ週間」の企画に携わった。内容について委員長との話し合いの中で、「～したほうがよいと思う」、「こういうやり方はどう？」と活動内容に対して積極的に意見を述べる姿がみられた。また、委員会活動中、困っている後輩を見て、すすんで声をかける姿もみられた（資料10）。3年間の実践を通して、少しずつ自分を表現できるようになり、多くの人とかかわることができたと考えられる。



資料9 Aが記入したメッセージ



資料10 副委員長として指示するA

4 研究の成果

<手だて1について>

1年次に実施した保健集会では、体験的なワークを通して「人それぞれ感じ方が違うことに気付いた」と答えた生徒が85%、「伝え方や受け取り方の工夫をしようと思った」と答えた生徒が95%であった。2年次の学級活動では、エゴグラムで自己分析をした結果、「今後も大切にしたい自分と変えていきたい自分に気付くことができた」と答えた生徒が98%、これからの生活にいかしてきたい具体的な行動目標を記述できた生徒が93%であった。3年次の保健集会では、ロールプレイングやスクールカウンセラーからの話を通して、「自分も相手も大切にしたいコミュニケーションをとろうと思った」と答えた生徒が96%であった。これらのことから、多くの生徒が自他と向き合い、その違いに気づき、互いを尊重したコミュニケーションをとることの大切さが理解できたといえる。よって、手だて1は有効であった。

<手だて2について>

「ホミトーク」を通して、「学級の雰囲気よくなった」と答えた生徒が92%、「性別や国籍の違いに関係なくなかよくできた」と答えた生徒が79%であった。生徒どうしの交流活動を意図的・継続的に実施したことにより、楽しみながら自他理解を深めることができた。その結果、相手との関係が深まり、すすんで他者とかがわることができたといえる。よって、手だて2は有効であった。

<手だて3について>

「ハッピースマイルデー」を通して、「自分からあいさつができるようになった」と答えた生徒が85%であった。「愛メッセージ週間」を通して、「積極的に愛メッセージを伝えることができた」と答えた生徒が81%であった。生徒主体となってすすめる交流活動により、以前よりあいさつができる生徒が増加したり、他者に対して温かい言葉がけが増えたりして、すすんで他者とかがわる生徒の姿がみられた。よって、手だて3は有効であった。

5 今後の課題

生徒たちは実践をすすめていくことにより、自他と向き合い、互いを尊重したコミュニケーションのために何が必要かを考え、気付くことができた。しかし、言語的コミュニケーションスキルについて学ぶ機会や、対話活動が多かったため、外国にルーツのある生徒に対しては難しい内容のものとなってしまった。今後は、非言語コミュニケーションについて学んだり、言語に頼らずにできる活動を見直したり、ユニバーサルな視点を取り入れ、言語や文化を超えて、すすんで他者とかがわる生徒を育てていきたい。

【参考文献】

- ①岡本泰弘、杉田峰康、春口徳雄「子どものためのエゴグラム・ロールレタリング実践法 自分の心がわかれば、相手の心も見えてくる」少年写真新聞社 2009年
- ②園田雅代、鈴木教夫、豊田英昭「イラスト版子どものアサーション 自分の気持ちがきちんとと言える38の話し方」合同出版 2013年

6 第71次教研での討論内容と残された課題

(1) 全体の感想

「子どもが生活の主体となるための保健教育」をテーマに、さまざまな健康課題に対応するため、教材・教具を工夫した実践、子どもの主体的な活動を中心とした実践、学校内・外との連携を深めた実践などが報告された。報告を通して、健康に対する意識の高まりや、健康課題の解決にむけた実践力が着実に育っている様子が感じられた。

(2) 討論の内容

ア 指導方法・指導形態の工夫

タブレットPCを活用し自分の口腔や姿勢の写真を教具として一人ひとりの健康課題の解決をめざしたとりくみや、心と体の両面に働きかけた新型コロナウイルス感染症予防に関する指導、学校保健委員会での学びをいかした朝食に関する指導が報告された。

討論では、子どもが主体的に学ぶための手だてについて話し合われた。自分の課題に気付くことができるように、アンケート結果の活用や話し合い活動が有効であるとの意見が出された。

助言者からは、担任や家庭と連携して継続的にとりくむことが重要であることや、家庭の背景に寄り添った指導方法を検討すべきであるとの助言を得た。

イ 心・命・性に関すること

怒りの感情を客観的にとらえることができる「きもちツイート」「心の温度計」を活用したアンガーマネジメントの実践や、スクールカウンセラーと連携してコミュニケーションスキルの向上をはかり自他の良さに気付かせた実践、教科横断的に行った命の教育が報告された。

討論では、心の評価方法について話し合われた。子どもたち一人ひとりとの会話から変容をつかむことや、担任から子どもの様子を聞くこと、感想の活用について意見が出された。

助言者からは、他教科と関連させて多面的に指導をすすめることで深い学びにつながるとの助言を得た。

ウ 保健・総合などでの指導のすすめ方

保健委員ととりくんだ新型コロナウイルス感染症予防に関する指導、学校歯科医や家庭と連携した個別の歯科保健指導、危険予知トレーニングを取り入れたけがの防止の実践、家庭と連携して教科横断的に取り組んだがん教育が報告された。

討論では、実践後の意識・行動の継続について話し合われた。職員会議での指導内容の提案や、他教科の教員と連携し継続的にとりくむこと、家庭と連携するなどの意見が出された。

助言者からは、指導計画を共有し学校全体でとりくむことの大切さ、がん教育にとりくむためには一人ひとりの家庭の背景に留意する必要があるとの助言を得た。

エ 生活にいきる保健教育

校内で組織的に食育や体力の向上にとりくんだ実践、保健体育科の授業や掲示物などに関連させて継続的にとりくんだ生活習慣に関する保健教育、学校全体で心と体の健康増進をはかったとりくみが報告された。

討論では、家庭との連携について話し合われた。実践内容を家庭に知らせて共有をはかる、保健だよりにアンケート欄を設けて保護者の思いを把握し寄り添いながら実践をすすめるなどの意見が出された。

助言者からは、新型コロナウイルス感染症の流行が懸念される今、生活習慣の指導が重要であることや、子どものことをより理解している担任が中心となり学校医や学校歯科医と連携して組織的にとりくむことが有効であるとの助言を得た。

(3) 今後に残された課題

ア 子どもが自ら課題を見つけ、解決の方法を見出していく力を育むための指導のすすめ方

イ 他教科とどのように関連付け、評価をどのように行うか